

アメリカ聾教育史における手話法(3)

— 言語指導における H. P. Peet と W. W. Turner の論争を中心に —

上野益雄

○問題の所在

ろう教育史において、言語指導法の流れは、文法的方法と自然的方法という面からとらえることができる。この二つの考え方は、すでにヨーロッパのろう教育者たちの間にも見られる。よく知られているように M. Hill (1805 - 1874) の母親法といわれる原理を中心とした口話法は、自然的方法である。19世紀のアメリカ聾教育は、当初から文法的方法の基盤の上に立っていた。では文法的方法、自然的方法とは何か。荒川勇は「アメリカの聾児言語指導法史」の一連の研究の冒頭に、次のように説明している。¹⁾「前者は一言で言えば、文法によって語や文章形式を分類、整理し、生徒に文法規則を記銘させて、言葉の理解、使用を導びこうとするものである。即ちそれは言語の習得が文法的規則に基いてなされる。学習される言語は文法的に整理され、文法的に正しいスタイルの言語であり、慣用的言語と必ずしも一致しない。しかして語や文章の提示に組織的、段階的な課程をもつ。

後者は、聴幼児の母国語を修得する方法を聾児の言語指導に適用して、言語の理解、使用を導びこうとする方法である。日常経験や必要によって導びかれる実際的な言語は、慣用的な言語であって、文法的にみれば例外的、慣用的なものを含み、語や文章形式に教師の選択的なものを含むが、その課程は必ずしも組織的、構成的、段階的な、一定の Order を要しない。

以上の如くして両者の基本的相違は、文法的方法は理論が実際に先行し、自然的方法はその逆に、実際に理論に先行するところから生ずる」

H. P. Peet (1794-1873) は、文法的方法の立場に立つ人である。²⁾もう少しくわしくいえば、当時のろう教育の伝統の上に立って、マニュアルを作成し、文法的方法を明確に示した人である。彼は、1822年エール大学卒業後、ハートフォード校

(American Asylum for the Education and Instruction of Deaf and Dumb person at Hartford.) の教師となり、1831年から1867年までの37年間にわたってハートフォード校につづいて設立されたニューヨーク校 (New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb) の校長をつとめ、当時のアメリカろう教育界の第一人者として中心的役割を果たした。彼は、1844年に“A Vocabulary and Elementary Lessons for the Deaf and Dumb”をニューヨーク校の第一学年目用のテキストとして出版したが、好評ですぐなくなったため、“Elementary Lessons, being a course of instruction for the Deaf and Dumb, Part First”として改訂して出版した。Scripture Lessons の小冊子をも含めて1849年までに4巻のテキストが出され、特に、最初の Elementary Lessons は、広くアメリカのろう学校で用いられた。

アメリカろう教育における言語指導は、フランスの Roch-Ambroise C. Sicard (1742-1822) の伝統をひいて文法的方法をうけついでが、特に H. P. Peet にとって、言語教育はひとつの科学であり³⁾、ひとつひとつ易から難へと積み重ねて指導の手順を築きあげていくべきものであった。

本稿では、かつて H. P. Peet と同僚であり、ハートフォード校の校長としてやはり指導の立場にあった、W. W. Turner の文法的方法に対する批判とそれを受けての H. P. Peet の反論を中心に言語指導と手話に対する考え方の関連を考察する。

○W. W. Turner の主張の位置づけ

アメリカにおけるろう児の言語指導法にあって、自然的方法の起りは、実質的には、1870年代に入ってからであり、D. Greenberger を中心として、口話法を背景に欧州の自然法による聾児言語指導の導入と、一般の外国語指導における自然法の聾

児言語指導への適用の二つの潮流であった⁴⁾とされている。

自然的方法は、口話法に伴う方法であり、文法的方法は、manual systemの中で手話法によって支えられたものである、と考えればわかりがよいのであるが、必ずしもそうではない。これらの間の関連については、今後の課題であるが、combined system(併用方式)の立場にあったE.A. Fay(1843-1923)は、1869年にイギリス、フランスの外国語教授法を紹介し、聾児の言語指導に示唆を与えており⁵⁾1877年にも自然法による言語指導についての提言をしている。⁶⁾ペンシルベニア校(Pennsylvania Institution for the Deaf and Dumb, 1821年 ニューヨーク校につづいて設立)のB.D. Pettengill(1813-1887)も、1876年に自然法について発表している。⁷⁾また、インディアナ校(Indiana Institution for the Deaf and Dumb, 1844年設立)のW. H. Lathamは1872年の論文で、文法的方法をきびしく批判している。⁸⁾このように1870年代から文法的方法は、批判され修正が加えられるようになるのであるが、同時に、同じ文法的方法の立場に立つR.S. Storrs(1830-1884)によっても、H.P. Peetの方法は批判を受け⁹⁾言語指導に自然的方法の影響が、次第に見られるようになっていくのである。

Turnerは、早くも1849年に、H. P. Peetの方法に対して批判を向け、1849年から1852年にかけて、前後3回にわたってAnnals誌上において論争をしている。後の自然的方法の起り、そしてmanual systemがcombined systemへと移行するに従って、自然的方法の影響を受けていく経過の中で、このことをみると、Turnerの意見は、その最初のあらわれとして、重要な意味をもつものと考えられる。

○H. P. Peet と Turner の共通の基盤について

H. P. Peet と Turner の両者は、激しい論争を展開したのであるが、その前に、両者の共通の基盤について指摘しておく必要がある。それは、①ろう教育の言語指導において、手話が必要である。②書きことばの完全な習得とそれによって思考を可能にさせる。ということである。フランスの

Sicardの方法を導入したアメリカろう教育であるが、両者ともSicardの方法を全面的には受け入れていない。特にTurnerにあっては、より批判的であったが、しかし、ドイツ法、イギリス法¹⁰⁾といわれているものをしりぞけ、発音による方法にたよらないで、フランスのシステムがアメリカろう教育に導入されたことは、幸いであった、と評価している。手話についての考え方、さらに自然的手話、方法的手話¹¹⁾の使用については当時のろう教育者の中では、H. P. Peet との対立はそれほど大きくない。¹²⁾Turnerはろう者の手話使用についての理解を示しているし、ひとつの言語としても認めている。しかし、そうは言っても、Turnerの手話についての考え方は、あいまいな面もあり、彼の自然的手話も方法的手話もあまり多く使わずに、という意見の中には、H. P. Peetに比べて、明確な考え方をもっていたとは、どうしても考えられないのである。この点については、後程説明することにする。

Turnerは、新任のろう学校教師への助言の中で、次の4つを示している。¹³⁾①ろう者の思考方法や表情とあわせて、彼らの用いる手話に精通すること。②手話の理論と語源を研究し、手話の力強い表現豊かな手段を修得すること。③いろいろなるろう学校で採用されている方法を理解し、本によって勉強もすること。④経験のある教師から学び、生徒の興味を起させる新らしい効果的方法を工夫すること。これをもて、彼の手話に対する考え方は、H. P. Peetとは、少くとも表面上はちがうところは何もないといってよい。しかし注目すべきことは、彼は、④のように、新らしい工夫を呼びかけている。Turnerによれば、H. P. Peetの方法は、基本的にSicardの方法の引きつぎであり、Elementary Lessonsは、改善が加えられていると評価しながらフランスのA. Bébien(1789-1839)のmanualにならったもので、Scripture Lessonsは、ハートフォード校が1829年に出したCatechism of Scripture Historyの模倣であるという。¹⁴⁾

TurnerのH. P. Peetに対する批判は、自然的方法の考え方に立つべきだ、と主張する点で、対立したが、それでは指導の具体的面でどれほどのち

がいがあったか期待してみる時、具体的手順では、それ程大きなちがいを見せたのではなかったのである。

では、Turnerの提案はどのようなものであったか、次にみることにする。

○Turnerの言語指導一般に対する提言

1849年 American Annals of the Deaf and Dumb (Vol. 2, No. 2) 誌上の Course of Instruction において、Turnerは、ろう児の言語指導に関する提言を行っている。これは、表面的にのみ限り H.P. Peet に対する批判として出されたものではない。しかし、H.P. Peet からすぐさま批難と反論が Turner に対して出された。その激しさは理解に苦しむほどである。恐らく、Elementary Lessons を出した H.P. Peet にしてみれば、直接自分への批判と受け取ったのであろう。しかもハートフォード校は、他のろう学校の親学校であったが、ニューヨーク校も第2番目設立とはいうものの、やはりハートフォード校と並ぶ地位を占めていた。Turnerの頭の中には、親学校である、という気持ちがあり、H.P. Peet にも、指導的学校であるという自負心があったと思われる。

ここで、H.P. Peetの文法的方法について述べておくべきであるが、本稿では、Turnerの主張との関連において、みることにする。H.P. Peet については、改めて取り上げる必要があり、紙面が限られているため取り上げないが、荒川勇の「アメリカの聾児言語指導法史」文法的方法 — H.P. Peet の Lessons を中心として — (ろう教育科学13(3) 1971) を参考にしたい。

さて、Turnerの主張をかいつまんでその要旨を述べると、次のようである。¹⁵⁾

彼の主張は、ひとことで言えば、聴児の言語習得にならえ、ということである。そのいうところを筆者なりに整理してみると、

- ①言語指導の目標
- ②フランス式指導教程 (French Course of Instruction) について
- ③聴児の言語発達について
- ④ろう児の言語習得について
- ⑤言語指導に対する提言のまとめ

ということになる。

①ろう児の言語指導の目標は、書きことばの完全な習得と、それによって思考を可能にさせることである。言語に精通するということは、特殊な事柄の知識に通ずることではない。つまり、文法とか論理とかを教えることが第一のことではなく、実際に使用できることが大切である。考えていることを言語で明確に述べ、表現された他人の考えを完全に理解することである。

②それではどのようにして、書きことばを最も効果的に習得させられるか、つまり最もよい指導法は何か。

アメリカで現在行われている方法、即ち、フランス式指導教程は、言語と文法とを結びつけて教えることを原則としている。句や文は、単に文法的規則を説明する目的、つまり、文法の原則を記憶に定着させる目的で作られられる。それ故、語は名詞、形容詞、動詞、助動詞などの文法的クラスに整理され、さらに名詞は、格、数に、動詞は、規則、不規則、能動、受動などに整理される。簡単に言えば、文構造の規則は、関連した文例が与えられないうちに、適当な句によって示され説明される。これらの原則が心に銘記されて、生徒はある事柄についての考えを表わす必要があるとき、正しく組立てるのに応用される。この文法的構築の法則がマスターされて、生徒は誤まりを正す手段をもち、正しい文を作る指針をもつ。すでに母国語に精通しているものが、外国語を学ぶとき、上記の方法は有用であろうが、誰もこのような方法で、子どもに話したり書いたりすることを教えようとは思わないだろう。この指導法は、人工的な逆の手順である。子どもの頭を混乱させるだけである。

③それならば、一体聴児の言語獲得はどうか。何が子どもの言語獲得を促がすのか。言語獲得の自然の順序は何か。子どもは、模倣によって言語を学習する。子どもの要求が言語学習を促進させる。子どもは最初に欲しいものなまえを覚え、語は要求の表現となる。子どもが milk という語を覚えたとき、母親は他の一連の食物の名前を覚えさせてから使わせるだろうか。子どもは気分よい感情をもつとき pretty とか good とか学ぶ

だろう。規則や分類なしに、子どもはくりかえし語や句を聞いて模倣する。要求や考えを表わすことを覚え、用いる。それは絶えずくり返すことによって正しくされ、社会で通用するものとなっていく。さらに本を読んだり、文字を書いたりすることに発展するが、何も文法の規則を学んだからではない。しかし、文法の知識が不必要だということではない。適切な時期に達して、実用的知識が科学へと移行する、抽象的な知識へと向う準備ができた時期がくる。そのときが文法の規則を学ぶときである。

④ ろう児の場合はどうであろうか。一般の幼児とどこが違うか。まず、ろう学校へくるろう児は年齢は高い。しかし、年齢に比べ精神状態は、まだ未熟である。従って知的状態は、外国語を始める場合とは異なる。聴児は、すでにひとつの母国語の構造を身につけており、教師との日常のコミュニケーションの方法をもっている。ろう児は、不完全なサインをもつだけである。それ故、母国語を学ぼうとする聴児と似ているのである。何故われわれは実際に聴児が母親と交わるような方法を追求しないのであろうか。つまりこうである。

- ・身のまわりのいくつかの物の名前を教える。
- ・子どもの要求を表わす語とともに、stand up., come here., open the door. など短い句を教える。何も分析はいらない。
- ・全体としてまとまったことを表わすことを教える。もし子どもがはっきり理解しないならそれでもよい。
- ・そして、短い簡単な物語りが与えられる。そうしたあとで初等クラスの歴史、地理の本が渡され、また、文法規則も始められるべきである。

⑤ 結論はこうである。現在のろう教育で行われているやり方は、あまりにこまかいステップにわかれ、しかもその順序も、合理的であるとはいえない。文も孤立した単文であり、文法的説明が多すぎる。もっと早くから日常的物語り文を導入すべきで、そのための指導手順を考えるべきであり、易しいテキストが望まれる。聴児の言語習得と同じ方法をもっと工夫すべきである。文法指導のための特別な表現は、除くべきである。

以上がターナーの提言である。

○ H. P. Peet の反論

H. P. Peet は、Turner の提言を、彼の Elementary Lessons に対する批判と受けとり、すぐさま Annals 誌上に反論を出した。この反論を中心に、彼の意見をまとめると以下のようなものである。¹⁶⁾

- ① 言語指導の原則
- ② 聴児の言語獲得について
- ③ ろう児の言語習得の場合
- ④ 言語指導の方策

H. P. Peet の言語指導上の原則は、S. Heinicke (1727-1790) の原理であった「観念 (idea) は語に先立つ」ということ、および A. Bébien の原理として知られる「困難は出来る限り分割され、一時にひとつのことが易から難へと導入されるべきである」というものであった。¹⁷⁾

① 上記原則をもとにして、彼は次のように言う。Elementary Lessons の教程は、文法的規則を教えるものではない。最も基本となる身近な語を選び、原則にてらして、句、文、短い物語りと順次連結していくもので、全体として言語の最も簡単な形で初歩的事項が与えられる。段階を追っていく指導手順は、規則的、論理的順序であって無秩序であってはならない。Turner によれば、単語からはじめて句、文、物語り文へ進める中で、物語り文を早くから入れるようにとすすめられている。しかし、単文は、物語り文より理解し易いのである。物語りは、それらを作るひとつひとつの文の理解なくしては、理解できない。物語りをすぐに生徒に与えるとき、説明しなくてはならないことが、多くありすぎて、生徒を迷路へ落とし入れることになる。母親が子どもに接するやり方は、一般によく知られるものでたいいの教師は知っている。しかし言語指導とは相入れない。

② 聴児の言語獲得について

Turner は、「言語を獲得し始める聴児とろう児はどこがちがうのか」という。第一にろう児である点、まわりで話されることを理解できない点がちがう。語は、手話よりもコミュニケーションのよりおそい、困難な手段である。聞こえる子どもは、自発的に語をまねる。語は自然のさまざまなト-

ンで発せられ、耳に連続して入ってくる。話された語を聞くと同時に、それに伴う表情、ジェスチャー、動作をみて、くり返すことで、よりはっきりと知的に観念にまでなる。語や句は、心と身体が分けられないと同じように心にきざまれ、永久に心の一部となり、思考の伝達の道具となる。

聞える子どもは、語で観念、思考を獲得するので、言語を通して学び、考え、話す。従って、聴児にとって、言語は、自然に獲得できるまさに母国語なのである。

③ろう児の言語習得の場合

ろう児の場合は、聞こえる子と大きく異なる。施設にきたろう生徒は、すぐに表情の言語を学ぶ。これは、音声とイントネーションの言語と構造がちがうし、文字言語ともちがっている。このちがった言語でいろんな会話や議論を楽しみ、この言語で考えることを学ぶ。それを通して聴児が獲得できるのと殆んど同じように知識を獲得する。つまり、これが母国語となる。最初は特に、そしてしばらくは、彼と教師とのコミュニケーションの手段となる。

「施設のこの手話言語の育成と拡充は、利益と不利益を伴う。Turnerは、フランスのシステムに賛成し、手話の利益を言うが、不利益については何も言っていない」¹⁸⁾

ろう児の思考は、自然とこの言語で形づくられる。スピーチと同じ速さでたやすくコミュニケーションでき、それは、社会的交わりにおいても、考えを表現する場合でも必要なものとなる。つまり、生きた言語である。文字言語は、考えるのがむづかしく、骨の折れる、人工的、つまり、死んだ言語である。

ろう児の状態は、一般の人が母国語を学ぶ場合とラテン語の場合との中間、いや後者の方により近いのである。しかも特殊である。母親のようには無意味である。

ろう児の特別な状態が困難を引き起し、音声言語の学習を妨げる。特別な努力、必要な教育なしでは、この言語学習は達せられない。

(4)言語指導の方策

それではどのようにすべきか。

聞こえる子どもは、自然に言語を学ぶ。ろう児

は、長い精神的努力によって書きことばを学ぶ。前者の思考習慣は、スピーチの語順でずっと訓練されるが、後者の思考習慣は、表情の言語で作られる。ろう児を、楽しんで本を読むところまでもってこられない。言語ではっきり考えを表わすようにもってこられない。つまり、意志と努力で、訓練によって、われわれの言語の語順で考えられるようにするまでは、生徒は、語から語へと骨折って、自分の手話に翻訳するだけである。そして、翻訳してはじめて意味がつかめる。いや、いつも意味が理解できるわけではない。ろう児の思考を変えさせるためには、時間と労力が必要であり、その変化のためには、徐々にやさしいものからしなくてはならない。先ず生徒に、句、文、それは広く応用される簡単な表現のみでなく簡単な構文をも教えねばならない。くり返し、くり返し、そして思考は順次作りあげられていく。

物語りは、単文よりおもしろい場合もあるだろう。ただし、はっきりと理解するならばである。しかし、手話を通して理解してしまう。興味は手話に依存したものなのである。すぐれた教師は、単文の説明にも生徒に興味を与える。歴史、地理などのテキストを出来るだけ早く普通の聴児と同じものを使用することについては、ろう児が、聴児と同じ言語力をもっているならばよい。教程の初期に、このようなテキストを用いることは、言語の困難さを分割し、ステップにきざんでいく原則に反する。従って、困難さを増大させ、散漫なやり方によって、本の使用に必要となる言語指導が成り立たず、混乱が起るのである。

以上が H. P. Peet の要旨である。

○H. P. Peet の文法的方法に対する Turner の具体的批判

さきにも述べたように、Turner の考え方は自然的方法を主張する割には、具体的には、それ程新しい案を提出しているわけではない。Turner は、現在、用いることのできるテキストはないと述べ、新しい工夫が必要というが、具体的には、はっきりと方法を提示していない。彼は「一般的な言語指導について提案したのであって、こまかいテキストの手順については述べていないのだ」とい

っている。しかし、具体的な指導法について言っていないわけではない。まず、最初の名詞、形容詞などの簡単な句の導入のところまでは、H. P. Peetと同じであり、また、指導の「順序」というよりも、むしろ指導する「時期」が問題である、というのである。

語や個々の文の大部分を終えるのに、H. P. Peetは、最初の2年間を必要としている。Turnerは、反対に、いくつかの語を学んだなら会話的な句や日常用いられる文を導入し、特別な文の構造は、テキストの中や日常起きる出来事の中で説明すべきであり、それによって子どもの心を広げていくべきだとしている。

ニューヨーク校が5年目になって、歴史や地理のテキストを用いるのはおそすぎる、なぜもっと早く使わないのか、と言う。¹⁹⁾

具体的な指導手順について、例えば、以下のような批判を行っている。²⁰⁾

- ①なぜ形容詞の導入が動詞の前でなくてはいけないのか。
- ②(形) + (形) + (名)の句が簡単な命令形 bring a pen. などより先に指導されねばならないのはなぜか。
- ③ animal, person, などの総称的名詞が、単純な, head, hand, などより早く扱われるのか。
- ④なぜ, that black duck is driving. のような分詞形の is が形容詞を伴った that boy is tall. よりも早く扱われるのか。
- ⑤なぜ this, that, these, those などが論理的な教程であるとして, 44課, 60課, 67課で使用されるのか。一方同じクラスの the が同じやさしさであり, 必要でもあるのに, 136課にくるのはどうしてか。that boy などの that が13課であるのに, どうして1年もたってから定冠詞がくるのか。
- ⑥人称代名詞が, なぜもっと早く教えられないか。I, you, we など理解しやすいのに, some, all, many などよりずっとあとである。I am writing, you are sitting と, that girl is writing, these boys are sitting は, どこにむずかしさのちがいがあのか。
- ⑦106課になるまで前置詞がでてこない。しか

も複文のあとである。Men take bricks and build a new house などより, go to the door, stand on that bench があとであるのは, 理解できない。

など, 文法的難易の配列は, 生徒にとっての難易なのかどうか, Turner は疑問を出した。彼のコメントの目的は, 次の2つであった。

◦どのような語が, 最初に教えられるかは, 指導上全く関係のない事柄である。

◦状況, 経験, 適切な判断が, 教師の指針であるべきである。²¹⁾

Turner は, Hartford 校で用いている教材の例として, 次のものをあげている。²²⁾ これは, H. P. Peet にあっては, 77課(前置詞のないもの)と107課(前置詞のあるもの)に分けられているものである。H. P. Peet とちがって物語り文が入っている。

Barn,	I carry,	She carries,	
Pail,	I sit down,	She sits down,	Here is a
Hand,	I milk,	She milks,	Picture illustrating
Ground,	I kick,	She kicks,	the story.
Milk,	I beat,	She beats.	

A girl goes to the barn. She carries a pail in her hand. She sits down near a cow. She milks into the pail. The cow kicks the pail over. The milk runs on the ground. The girl beats the cow.

A girl goes to the door.	A horse kicks a dog over.
A boy goes to _____	A _____ kicks a cat over.
A cat goes to _____	A _____ kicks a cup over.

Turner は, こまかい個々の内容をとりあげることに目的ではないと言っている。彼にとってはどのような順序が最良であるかが問題でないことは, 上記の2項のことからもわかる。しかし, 実際の指針としては, H. P. Peet の文法的方法とそれほど異なったものではなかった。ただ教師の判断によるところが多かったと言える。一方 H. P. Peet の教程は, 非常にこまかいステップで配列され, Turner の批判事項のひとつに対しても, それなりの理由があり, 類似の文例が並べられている。これは, 当時のラテン語学習の方法からの影響が多分

に見られ、H. P. Peet自身そのことについて述べ、「ラテン語で考える習慣 (the habit of thinking in Latin) が大切であるように……ろう児には、英語で考える習慣 (the habit of thinking in English) が大切である」²³⁾ といっている。

・両者の相違点についての考察

Turner は、恐らく H. P. Peet の Elementary Lessons を直接に頭において攻撃したのではあるまい。むしろ一教師として、現実の言語指導に悩み、何とか解決はないかという苦しみをもった一人であった。しかし H. P. Peet の文法的方法が頭の中にあっただけで事実である。

彼の言語指導一般に対する提言に比べ、具体的な指導法ということになると、それ程自然的方法であるとは言えない。むしろ形態としては、文法的方法に近いともいえる。このことは、自然的方法が、聴児の言語習得にならうものであるのに、manual 体制の中でろう児に手話を用いながら書きことばを習得させることに目標をおいていた、ということ自体の制約によると考えられる。しかし、Turner と H. P. Peet とは、同じ manual 体制の中にありながら、考え方においては対立を示した。それは、何によるのであろうか。両者の方法上の相違点を、筆者は、手話についての考え方の相違という点から考察してみたい。それは、次の2つの点にわけられる。

・手話そのものに対する考え方の相違

・言語指導の中での手話の功罪についての考え方の相違

さきに手話に関して両者はそれ程のちがいをみせなかった、と述べたが、やはりそのわずかなちがいが大きな意味をもつと筆者は考えている。つまり、H. P. Peet は、はっきりと手話をろう者の言語である、ととらえている。Turner は、あるところでは、手話はろう者の言語である、と述べてはいるが、H. P. Peet とはちがっているのである。彼は、次のように言う。ろう学校へくる生徒は、知的に未熟であり、単に不完全なサインをもつにすぎない。「年はとっているが、たいていの場合精神的に成熟していない。ろう児の知的状態は、教育開始時には聞こえる子どもが、外国語を学習し始

めるのとはことなる。聞こえる子どもは、すでにひとつの言語の文法とその構造にすでに精通している。そして教師とコミュニケーションの共通の手段をもっている。しかし第一言語として英語を学ぼうとするろう児では、非常に制限された不完全なコミュニケーションの手段しかなく、それは彼を孤立させざるをえなかったわずかのサインだけである」²⁴⁾と。H. P. Peet は「(ろう児は)この言語(手話言語—筆者註)で、あらゆる議論を熱心にするし、会話を楽しむ。この言語で彼は考えることを学び、それを通して、彼が獲得できるいわゆる知識のほとんどすべてを獲得する。いいかえれば、それは母国語となり、ある場合教師とのコミュニケーションの唯一の手段となる。われわれの学校でのこの言語の育成と拡充は、利益と不利益を伴うことになる」というのである。つまりこういうことである。H. P. Peet にあっては、手話はひとつの母国語としての言語であり、従って、興味あることや要求を満すために話し、表現しうる言語であって、ろう児の思考は、それによって自然に形づくられ、スピーチと匹敵する速さでコミュニケーションしうるものであった。そして、それなしでは社会的楽しみもありえないものであった。それは生きた言語であって、逆に書きことばはむづかしい、人工的な外国の死んだ言語である、というのである。だから H. P. Peet にあっては、「ろう児の言語学習は、母国語を学ぶ生徒というよりもむしろラテン語を学ぶ生徒の状態に近い」²⁵⁾ ということであった。

Turner は、第3回ろう教員会議において、「ろう唾児に文法を教えることについて」という論文を発表しているが、その中で、²⁶⁾ ろう児の言語学習について次のように言っている。聴児の言語学習について述べたあとその対比として「ろう児では逆に、サインもしくはイメージで考える。そして、それと語の間には何の類似もない。それ故、手話の介在は、両者を関連づけるため、つまり語の意味を理解するためには、必要なものである」といっている。彼は H. P. Peet の言うように、手話の不利益、言語指導において手話が、書きことばを理解する上で、「語(英語)で考える」ということに妨げとなるとは言っていないのである。彼は、

他の何人かのろう教育者たちと同じく手話は必要だとしながら、しかも H. P. Peet と同じく手話の育成と拡充を言いながらも、一方では、手話はだんだんなくしていくべきであるとも言っており、彼の手話言語観は、それほどはっきりしたものでないと筆者は考えるのである。H. P. Peet にあっては、手話をなくしていくべきだ、という発言はないのであり、一方、言語指導にあって「語（英語）で考える」のに妨げとなり、「語は語で考える」訓練を重視し、そのために、練習、練習、練習を強調し、review, REVIEW, REVIEW.²⁷⁾ と書いたのである。従って、手話の言語指導における功罪について、H. P. Peet は、きびしい考え方を示している。彼は以下のように主張している。はっきりと、手話言語と英語はちがっているので、英語を学ぶ際の妨げとなると言い、聞える子どもは、自然に耳からことばを学ぶが、ろう児は、長い間の精神的努力によってのみ書きことばを学ぶ。聞こえる子どもの思考の知的訓練は、スピーチの語順で訓練されつづけるが、ろう児の知的習慣は、表情の言語というちがった言語で作られる。ろう児をして喜びをもって本を読むようにするのはむづかしい。語ではっきり考えを表わすようには、容易に、させられない。それは、意志によって、われわれと同じ言語で同じ語順で考えるようにさせるまでは、だめなのである。そうでなくては、語から語へと手話に翻訳するだけであり、翻訳するまで全体の意味はつかめない。いや、翻訳しても、いつも理解できるわけではない。²⁸⁾ そのため「thinking in word」への思考の変化には、時間と労力が必要であり、やさしいものからむづかしいものへ、しかもくり返しが必要だというのである。H. P. Peet が原理とした「観念 (idea) は、語に先立つべきである」ということは、彼によれば、「どんな語も、それが表わす意味、つまり句の中での語の役割、用法を生徒が理解しうるまでは教えるべきでない」ということであり、「難易の原則」(comparative difficult and easy)は、「最も困難さの少ない語や句から最初に与えるべきである」²⁹⁾ ということである。彼はラテン語の学習について述べ、フランス語を学びマスターした友人の例を出しながら「(友人の) フランス語が、観念

の直接の記号 — それは、英語の Representatives (代替物)ではなく Synonymes (同義語) — となった。それが彼自身の言語構築の法則となり、まったく独立的に、英語と同じようなものとなった。これと同じように、ろう児も書きことばを手話の Representatives でなく、Synonymes となるように導びくことが必要である。しかも、ラテン語やフランス語よりもはるかにこのことはむづかしいことだ」³⁰⁾ といっている。

Turner は、実用にならないような文のくり返しでなく、初歩の基本的教程を終えたならば、日常使われる短い文や物語り文を入れていくべきだという。「H. P. Peet は、物語り文を入れると、生徒は混乱に落ち入ってしまうというが、何故なのか。物語りと結びついた言語は、生徒の心に固くきざまれるにちがいない」³¹⁾ というのである。しかし Turner は、経験から述べてはいるものの、あまり論理的ではなかった。文法的方法が、理論先行であるとはいえ、自然的方法の考え方を提唱する Turner にあっても、経験を裏づける理論がないとき、逆に H. P. Peet から「その場かぎりの、統一のないでたらめな指導をすることになる」と言われても、致し方ないことでもあった。

現実の生徒の状態は、言語の力が貧弱であった。在学期間の短い中で、しかも、年令の高い生徒たちにとって、日常生活に役をなさない言語指導は、Turner にとって疑問であった。2年間をみっちり基礎的構文の学習に費いやし、3年半ないし4年たって、つまり5年目に入ってから、歴史、地理、Scripture Lessons に入るのでは、現実の生徒のニードに合わないことでもあった。Turner は、次のように言う。「われわれの言いたいことは、言語の困難さに従って配列していくその「順序」よりも、むしろいつするかという「時」に関心がある」³²⁾ と。「順序」に何ら科学的根拠がないということと同時に、そのことよりも、早くから日常的、会話的文を入れることが必要だと強調した。とはいうものの、その具体的指導手順の大枠は、H. P. Peet とたいして変わりはなく、自然的方法というのにふさわしいものではなかった。勿論、Turner は、教師の経験によって Text にとらわれないことをすすめているのであるが。

ともあれ、1849年の時点で、Manual 体制の中にあつて、文法的方法が、自然的方法の考え方から批判されたことは、注目すべきことである。

○結 語

本稿では、やがて1870年代から生じてくる言語指導法における自然的方法、それに伴う文法的方法への批判に先がけて、1849年から1852年にかけてH. P. Peetの文法的方法を批判したTurnerに注目した。同時に、H. P. Peetの反論によって、彼の考え方をもみてきた。Turnerの批判は、それほど論理的なものではなく、彼の言語指導の具体的方法は、明確なプランをもったものではなかったが、後にH. P. Peetの方法が批判を受け、修正されていったことを考えると、Turnerの批判は、ろう教育の言語指導方法が移り変っていくひとつの徴候を示すものといえる。

Turnerにあつては、まだcombined systemに入る前の時期であり、manual systemの時期にあつて、自然的方法の考え方を、より具体的実践に移すことには、制約があつたと考えてよい。³²⁾ やがて、E. A. Fayによって、もう少しまとまった形として自然的方法が姿をみせるのであるが、Turnerにあつては、Fayとちがってまだcombined systemに入る前の時代であつた。現在の視点からみて、その承認が自明の如く感ぜられる自然的方法であつてみれば、Turnerの提言に評価を与えるべきであろうが、しかし、過大に評価すべきことではない。特に筆者は、H. P. Peetの考え方に対して興味を覚えるものである。そして、手話がろう教育のその後の歴史の中で、その位置をもたなくなつていった根は、Turnerらの当時の考え方の中に芽生えていた、という推測をもっている。

◎本稿をまとめると以下のようなになる。

manual systemの時代にあつて、Turnerはろう児の言語指導の自然的方法による考え方を提示し、H. P. Peetの文法的方法を批判した。即ち、聴児の言語習得にならえというものであり、文法的方法は、言語を文法によって説明するもので、ろう児の言語習得を促進させず、興味をなくしてしまう、と考えた。日常的会話を、基本的なく

つかの語を学んだあと、使用させ、物語り文も出来るだけ早く入れていくことをすすめた。

これに対し、H. P. Peetは、言語は一つ一つ易しいものから難かしいものに、築きあげていくべきものであると考え、こまかいステップで文構造をしっかりと生徒の心にきざみつけることが必要であるとした。

以上の考え方のちがいについて、筆者は、手話に対する考え方の相違に注目した。前者は、手話を言語指導の中で必要なものであるとし、ろう者の言語としての手話を認めていながらも、その言語としての位置づけは、あいまいであり、言語学習において、音声言語(書きことば)の手話への翻訳過程は、ろう児にとって必然的なことと考えた。これに対し、後者は、手話をろう者の言語としてはっきり位置づけた。しかも、意外にもというべきことに、言語指導において、手話は音声言語(書きことば)の習得の妨げとなり、従つてthinking in wordsにまでろう児をもっていくには、訓練が必要である、と考えた。そして、Turnerは、日常の実用的言語に重きをおき、H. P. Peetは、論理的思考の基礎としての言語に重きをおいた、といえる。

1849年の時点で、manual systemの時代にあつて、自然的方法の考え方が出されていたことは興味深い。ろう児が、言語学習に興味をもち、より実用的な言語指導が必要である、と考えたTurnerの意見は、次にくる時代に先がけたものであつたが、H. P. Peetの考え方も、捨て去られていくものとして無視するには、その中に重要なものを含んでいるのではないかと、考える。

言語教育は、古くて新しい問題である。勿論、当時の方法がそのまま現在に通用するものではないが、ろう児の言語指導において考えさせられるものがある。また、現在わが国における英語教育の活発な議論とも関連のあることだと、文献を読みながら考えさせられた。H. P. Peetについては、今後の課題としてあらためてとりあげたい。

〔註〕

- 1) 荒川勇 (1969) : R. S. Storrsの文法的言語指導法—理論と方法 (その一) —, ろう教育 24, (9), 30.
- 2) 荒川勇 (1971) : アメリカ聾児言語指導法史—文法的方法— H. P. PeetのLessons を中心にして, ろう教育科学, 13(3),
- 3) H. P. Peet (1849): Course of instruction, A. A. D. 2 (3), 169.
- 4) 荒川勇 (1971) : アメリカの聾児言語指導法史 (その一), ろう教育 Vol. 25(9), 19.
- 5) E. A. Fay (1869): The aquisition of language by deaf-mutes, A. A. D. 14, (4),
- 6) 3) にくわしく扱われている。
- 7) B. D. Pettengill (1876): The natural method of teaching language, A. A. D. 21, (1).
- 8) I. L. Peet (1871): A practical view of deaf-mutes instruction. 16, (2).
- 9) R. S. Storrs については, 荒川勇がろう教育(1969) 24巻, 9月号と10月号に発表しており参考になる。
- 10) ドイツ法とは教育の手段としてスピーチを用い, 手話, 指文字とも出来る限り禁止し, 唇をよみ, 口頭で話す方法, イギリス法は, ドイツ法とフランス法の中間的なもので, スピーチ指導をするが, 手話, 両手指文字等も若干使用する方法。
- 11) 上野益雄 (1981) : 第七章「初期のアメリカ聾教育における手話の役割」182—184 参照, 「手話の考察」中野善達編, 福村出版.
- 12) 上野益雄 (1980) : 19世紀のアメリカろう教育における手話の位置づけ, 特殊教育学研究 17, (4) 参照
- 13) W. W. Turner (1855): Means of success in teaching. A. A. D. 7, (2) 101.
- 14) W. W. Turner (1849): Course of instruction, A. A. D. 2 (4), 224—225.
- 15) W. W. Turner (1849): Course of instruction, A. A. D. 2 (2).
- 16) H. P. Peet (1849): Course of instruction, A. A. D. 2, (3),
- 17) H. P. Peet (1851): Course of instruction for the deaf and dumb, Proc. of the 2nd Conv. of A. I. D. 46.
- 18) H. P. Peet (1849): Course of instruction. A. A. D. 2 (3) 170.
- 19) W. W. Turner (1849): Course of instruction. A. A. D. 2, (4), 231.
- 20) W. W. Turner (1851): Course of instruction. A. A. D. 3(3) 184—185.
- 21) *ibid.*, 186.
- 22) *ibid.*, 188.
- 23) H. P. Peet (1851): Course of instruction for the deaf and dumb, Proc. of the 2nd Conv. of A. I. D. 58.
- 24) W. W. Turner (1849): Course of instruction. A. A. D. 2 (2) 103.
- 25) 16) 171.
- 26) W. W. Turner (1853): On the teaching of grammar to the deaf and dumb. Proc. of the 3rd Conv. of A. I. D. 252.
- 27) H. P. Peet (1868): The order of the first lessons in language for a class of deaf-mutes, Proc. of the National Conference of Principals of Institution for the Deaf and Dumb, 1868. 26.
- 28) 16) H. P. Peet, *op. sit.*, 173.
- 29) 23) H. P. Peet, *op. sit.*, 46.
- 30) 23) H. P. Peet, *op. sit.*, 58—59.
- 31) 14) W. W. Turner, *op. sit.*, 227.
- 32) 14) W. W. Turner, *op. sit.*, 222.
- 33) combined system の中であっても, 自然的方法が, 具体的指導法としては, 自然的方法と文法的方法の中間的形態にとどまったということも考えてみる必要がある。

Résumé

Manual Method of Education for the Deaf and Dumb in America (3)

— Controversy between W. W. Turner and H. P. Peet on Methods of Teaching Language —

Masuo UENO

The purpose of this study is to determine the difference of the methods of teaching language and the philosophy between W. W. Turner and H. P. Peet.

In 1849, at the time when the Manual System was being adopted, W. W. Turner proposed the Natural Method of teaching language to the deaf. He criticized H. P. Peet's Gramatical Method of teaching language. He thought that this method explains language through grammar and is not good in prompting or confirming language abilities of deaf students. Instead, Turner recommended that daily words and stories should be taught as early as possible.

On the contrary, H. P. Peet insisted that language must be constructed from easy words to difficult sentences. He made textbooks on Elementary Lessons and others. His Elementary Lessons Part I consisted of small steps and his aim was to build up sentence structures in the students' minds.

The writer noticed the differences of their opinions about sign language in relation to the methods of teaching language.

Turner admitted the sign language of the deaf as well as did H. P. Peet. However, there were slight but important differences between them. Turner wrote that sign language was necessary in the education of the deaf, but his philosophy of sign was ambiguous. He thought that the process of translation from sign to English was necessary for the deaf when they were learning language.

H. P. Peet favored sign language of the deaf. But he said that regarding the teaching of language, sign language hinders language learning. So, he suggested that training and review is necessary to bring "THINKING IN WORDS". He wrote, review, REVIEW, REVIEW.

Turner laid great emphasis on the daily and practical usage of language, whereas H. P. Peet gave priority to language for basic and logical thinking.

The writer found Turner's ideas to be very interesting as he offered the idea of the Natural Method at that time. (It is said that the Natural Method actually began to appear in 1870's.) However the philosophy of H. P. Peet can not be abandoned easily as an outmoded idea.